

## 敦煌出土銅錢占卜文書について\*

西田愛

### はじめに

敦煌出土文書中には、12枚の銅錢を投げその表裏の枚数によって各種吉凶を判断するという銅錢占卜を記した漢語、チベット語文書が存在する。漢語文書としては、大英圖書館所蔵の5點、Or.8210/S.813（以下、S.813）、Or.8210/S.1468（以下、S.1468）、Or.8210/S.3724、Or.8210/S.11415、Or.8210/S.5686（以下、S.5686）と、ロシア科學アカデミー東洋寫本研究研究所所蔵のDx.09941、Dx.09981の2點が知られている。このうち、S.3724とS.11415およびDx.09941とDx.09981は、それぞれ相互に接合することが判明している<sup>1</sup>、合計5點の文書が存在することになる（以下、S.3724 + S.11415、Dx.09941 + Dx.09981）。各文書の解説と合わせて、全文または一部の釋文が先行研究中に發表されている<sup>2</sup>。

一方、チベット語文書では、大英圖書館所蔵の4點、IOL Tib J 741（以下、ITJ 741）<sup>3</sup>、IOL Tib J 742（以下、ITJ 742）、IOL Tib J 744（以下、ITJ 744）、IOL Tib

\*本稿は、學位論文『古チベット語占い文書の研究——銅錢・鴉鳴・骰子占卜文書の比較研究を中心に』（西田愛：2012、神戸市外國語大學）の内容の一部に大幅な加筆・修正を加えたものである。

<sup>1</sup>黄 2001: 23。なお、S.3724 + S.11415の表面末尾から背面にかけては何度も同一内容が繰り返しかかれていたが、筆跡からは同一人物によるものと考えられる。本寫本には、銅錢占卜書以外にも六十甲子納音、老君立身詩、推九天行年災厄法などが練習書きされており、銅錢占卜の実施状況を考える上で大變興味深い資料と言える。

<sup>2</sup>黄 2001: 23-25、Kalinowski (ed.) 2003: 315-316, 347, 349, 351-352, 353, 361、王 2004: 150-151、郝・金（主編）2006: 354-356、余 2006: 268-270、郝・趙（主編）2010: 27-30、王 2013: 75-84、鄭・陳 2014: 21-27。なお、王愛和氏の學位論文『敦煌占卜文書研究』（2013、蘭州大學）でも詳細な研究がなされているようだが、筆者はこれまでのところ本論文を確認できていない。

<sup>3</sup>ITJ 741 文書には、ITJ 741.1 (Ch.80.IV) と 741.2 (Ch.80.IV.g) という2つの所蔵番號が歸屬している。トーマス氏によれば、ITJ 741.1 は 741.2 の前半部に相當する。Poussin カタログでも兩者の殘存行數や料紙サイズが合算されて表記されていることから、兩者は元來一寫本を形成していたと考えられる (Thomas 1957: 150、Poussin 1962: 234)。しかし、ITJ 741 文書は、IDP のウェブサイト上に寫眞が未公開である上、筆者が 2008 年と 2012 年に大英圖書館を訪れた際にも實見が叶わなかった。741.2 についてはマイクロフィルムにより調査を実施したが、741.1 に至ってはマイクロフィルムにも發見することができないため、現在までに内容を確認できていない。本稿で ITJ

J 1239 (以下、ITJ 1239) と、フランス国立図書館所蔵の P.t.1055、P.t.1056 の 2 点が知られる。しかし、ITJ 744 と P.t.1055 は、文面の連続性や筆跡、料紙幅などの状況からみて元來一寫本であったと考えられるため<sup>4</sup>、合計 5 點の文書が存在する(以下、P.t.1055 + ITJ 744)。これらに對して、いち早く研究を行ったトーマス氏は、大英図書館所蔵の ITJ 741、ITJ 742、ITJ 744 が、ラルーカタログ中の P.t.1055、P.t.1056 と關連することを指摘した<sup>5</sup>。その後、マクドナルド氏によって ITJ 742 と P.t.1055 の内容の一部が解説され<sup>6</sup>、同文書に對する翻字テキストと中國語譯も王堯氏、陳踐氏によって發表された<sup>7</sup>。

一方で、張福慧・陳于柱の兩氏は、卦辭の數、卦辭の構成、卦辭の内容の三點に着目して漢語本とチベット語本の對照研究を行い、チベット語本が敦煌或いはその周邊地域において漢語本を改編して作成されたものであると結論づけた。さらには、厚めの料紙が用いられていることや記述内容に吐蕃の傳統的信仰が反映されていることを理由に P.t.1055 が吐蕃期に作成された文書であるとみなし、その書寫年代はチベット語銅錢占卜文書全體に適用できると考えているようである<sup>8</sup>。しかし、兩氏の考察で參照されたチベット語文獻が上述の王堯氏、陳踐氏によって研究された 2 文書のみであり、漢語文書との具體的な對照例も示されていないことから、漢語・チベット語兩文書の比較研究は未だ不十分であると言える。そこで、本稿では、漢語文書に對する先行研究の成果とチベット語文書に對する筆者自身の見解を利用して敦煌出土銅錢占卜文書を横斷的に檢證し、兩者の相互關係について考察したい。その際、語彙の檢討のみならず、卦辭の構成や書式の分析を通して比較をすすめ、チベット語文書の作成された社會背景についても改めて考えてみる。

## 一、漢語文書の構成

漢語銅錢占卜文書は、概して序文と卦辭からなる。しかし、いずれの文書も一部ないし大部分が缺損しており、序文の存在は、S.813、S.1468、S.3724 + S.11415

741 に言及する場合は、ITJ 741.2 について述べるものとする。

<sup>4</sup>兩文書は、紙幅がともに 14cm であり、その筆跡は酷似している。また、記述内容を ITJ 741 の當該箇所(46-47 行目)と對應させてみたところ、P.t.1055 の末尾から ITJ 744 の冒頭へと連続する文面が確認できた(Nishida 2011: 316)。

<sup>5</sup>ITJ 741 と ITJ 742、P.t.1055 に對する部分譯も提示されている(Thomas 1957: 150-152)。

<sup>6</sup>Macdonald 1971: 282-283、Macdonald and Imaeda 1979: note 12-15。

<sup>7</sup>王・陳 1987: 134-148、陳 2007。以降の中國での研究は、概ね兩氏の翻譯を參照している。また、P.t.1055 と ITJ 742 に對する部分和譯が山口氏によって發表されているほか、筆者も ITJ 742 の翻字テキストと英譯を發表している(山口 1985: 533-534、同 1987: 173-175、Nishida 2011)。

<sup>8</sup>張・陳 2010: 69-71。

の3文書には確認できるものの、残る2文書については不明である。S.813では、5行目から37行目までが銅錢占卜書に相当し、5行目が序文に当たる。続く6行目以降に表が1枚の場合から12枚の場合までの卦辭が記されているため、S.813には全てが裏の場合の卦辭が記されなかったことになる<sup>9</sup>。各卦辭の構成について、8枚が表の場合を例に分析してみたい。

S.813、23-25行目<sup>10</sup>：

家人 ䷤ 易曰八文四曼 巽火木之卦 宜合相生 身吉 所求如意  
訴訟得通 病人得差 崇有樹神 犯竈君土公 繫者出 行人吉利  
宅中有恠 月忌七月 大吉利 先呪咀有急解除吉

ここでは、まず第一に「家人 ䷤<sup>11</sup>」という(A)六十四卦の卦名と圖象が示され、次に(B)銅錢の表裏の枚数を表す「八文四曼」がつづく。さらに、「巽火木之卦 宜合相生」という(C)五行による卦名と判断が下され<sup>12</sup>、「身吉 所求如意 訴訟得通 病人得差 崇有樹神 犯竈君土公 繫者出 行人吉利 宅中有恠」といった(D)項目別吉凶が並び、終わりには「月忌七月」という(E)忌月と「大吉利 先呪咀有急解除吉」といった(F)総合的吉凶や助言、指示の類い思われる内容が記されている。この構成には、配列順序や表記法の點で差異があるものの、全文書に共通性がみられた。各文書における卦辭の構成要素は以下の通りである。

S.1468：(B) (A) (C) (D) (E)

S.3724 + S.11415：(B) (A) (C) (D) (E) (F)

S.5686：(B) (A) (C) (D) (E) (F)

Dx.09941 + Dx.09981<sup>13</sup>：(A) (B) (D) (E)

<sup>9</sup>S.813の前半部は、料紙の上半分が欠損しているため冒頭部の詳細が不明である。しかし、筆者の検証によれば、5行目が序文、6-8行目が表1枚の卦辭、9-10行目が表2枚、11-12行目が表3枚、13-14行目が表4枚、15-17行目が表5枚の卦辭に對應し、18行目以降に表6枚以降の卦辭が続く。しかし、おそらく轉寫時の誤りによって表11枚の卦辭が二度續けて記され、表10枚の記述が脱落している。

<sup>10</sup>釋文は概ね郝・金2006に據った(郝・金2006: 354-358)。

<sup>11</sup>六十四卦は八卦を二つ重ねたものであり、「家人」は外卦(上)が「巽」で、内卦(下)が「離」で構成されている。圖象「䷤」の上は「☴」で「巽」を、下は「☲」で「離」を表しているため、この圖象が「家人」に一致するものであることが分かる。

<sup>12</sup>S.813では、「火木之卦」という五行にまつわる卦名の前に「巽」という八卦の名稱も付されている。これは、(A)六十四卦の卦名である「家人」の外卦(上)が「巽」であることと關連すると考えられる。なお、表が6枚の場合、7枚の場合の卦辭では、五行にまつわる卦名が脱落している。

<sup>13</sup>料紙の下半分を失った斷片であるため、(C)や(F)の記述の有無が確認できない。

これによれば、漢語銅錢占卜書の必須要素は、(A) 六十四卦による卦名、(B) 銅錢の枚数、(D) 項目別吉凶、(E) 忌月であったと推測できる。

以下では、卦辭を構成する各要素について検討してみたい。

## 1. (A) 六十四卦の卦名と圖象

S.813では、「家人」のほか「夔（噬）嗑☲☱」、「不（未）濟☵☲」、「否☷」という卦名と圖象の組合せをもつ卦辭も確認できる。しかし、このように六十四卦の名稱をとり、その圖象を配置するのはS.813とDx.09941 + Dx.09981の2文書に限られる。他の文書では「坎離下之卦」(S.1468)、「坎上離下」(S.3724 + S.11415)、「巽艮之卦」(S.5686)というように外卦と内卦に分割した名稱を採用している。しかし、六十四卦の名稱を採用する場合であっても、たとえば、「家人」を外卦と内卦に分割すれば「巽離之卦」や「巽上離下」と理解できる。そこで、以下では(A)の要素をひろく「易による卦名」と呼ぶことにする。黄氏によれば、これらの卦名は全ての漢語文書間に一致が見られ、各卦辭と卦名・圖象の關係は固定しているという<sup>14</sup>。實際にどれほどの一致がみられるのか、對照可能な箇所を以下に抜き出してみる。その際、六十四卦の名稱には括弧内に外卦と内卦の内譯を記して對照の便を圖る。

表1枚 坎離下之卦 (S.1468) 坎上離下 (S.3724 + S.11415)

表4枚 巽上艮下 (S.3724 + S.11415) 巽艮之卦 (S.5686)

表5枚 震兌之卦 (S.1468) 震光之卦 (S.5686)<sup>15</sup>

表6枚 ☰ (=乾艮) (S.813) 乾艮之卦 (S.1468)

大過 (遯) (=乾艮) (Dx.09941 + Dx.09981)

以上のように、確かに銅錢の表裏の枚数と卦名との間には固定的な關係がみてとれる。一方で、先行研究の各所で言及されている通り、銅錢占卜書に易との關連が示されるのは卦名や圖象だけであって、占卜法自體は易とは無關係である可能性が高い。したがって、カリノフスキー氏が銅錢の表裏の枚数と卦名の關係を術數學的見地から解明しようとしたのに對して、卦名は複雑なプロセスによって導き出されるものではなく各卦辭に固定的に割り當てられた名稱であると述べる黄氏の見解には首肯できる<sup>16</sup>。

<sup>14</sup>黄 2001: 24。

<sup>15</sup>S.5686では「震光之卦」とあるが、「光」は「兌」の誤りであろう。

<sup>16</sup>黄氏によれば、銅錢の表裏の枚数が逆轉すると易の名稱も外卦と内卦が入れ替わる。たとえば、表1枚・裏11枚は「坎離下」(S.3724 + S.11415)、表11枚・裏1枚では「不濟 (=離坎)」

## 2. (B) 銅錢の枚數

銅錢の枚數は、「X文Y曼」という定型書式で記され、通常は「文」が表を、「曼」が裏を表している。しかし、S.1468では、「一文仰十一文曼」と「六仰六曼」という表現が平行してみられる。ここからは、「X文Y曼」が「X文仰Y文曼」という形式に由来し、縮約される過程では、「X文Y曼」のみならず「X仰Y曼」も存在していた可能性がうかがえる。卦辭の配列は、表1枚の場合から順に列記されたことがわかるが、末尾が確認できるS.813によれば、最終卦辭は表12枚・裏0枚であった。では、全てが裏、つまり「無文十二曼」に対する卦辭はなかったのだろうか。この疑問に関しては、原本に既に記述がなかったのかもしれないという意見や、完本が見つければそこには見つかるだろうという意見が先行研究中に散見されるが、いずれも根據に乏しい。

一方、銅錢占ト書と考えられるものが西夏語文獻中にも見つかることが分かった。『西夏王國の言語と文化』の中で、西田氏は西夏のおみくじとしてスタインコレクション中の残片を紹介している<sup>17</sup>。また、これに近似するものがロシアコレクション中にある目録未登録の「大唐三藏西天」なる資料中にも存在し、「觀世音菩薩造念誦卦」という表題がつけられているという。西田氏によるスタイン文書の抄譯をここに提示したい。

七卦五滿ハ金火ノ卦也、身卦ハ即チ優ル、求財ハ來ルヲ得ズ、行人ハ  
行キ、來ルヲ怠ル、病人、結婚ハ成ラズ、訴訟ハ便來リ得ル、來ルベ  
キハ來リ、去ル

この斷片は六卦から始まるようだが、はじめの一行は四字目から切れており、本斷片には六卦六滿、七卦五滿、八卦四滿、九卦三滿、十卦二滿とつづいて、十一卦一滿までが残っているという。「はじめの數とあとの數を合計すると、すべて十二になるように配分されている」と西田氏も指摘するように、これは銅錢12枚の表裏の數を「X卦Y滿」という定型句で表した銅錢占ト書であろう。

さらに、ロシアコレクション中の「大唐三藏西天」に収録される「大唐三藏卦典」なる文獻にもこれと類似する内容の占ト記述が見つかる。再び西田氏の譯文を引用したい<sup>18</sup>。

(S.813) となる(黄 2001: 24-25)。この點で、易の名稱には一定の法則性が見いだせるものの、銅錢の表裏の枚數の各々が「坎」や「離」といった八卦の要素と結びついているわけではない。

<sup>17</sup>西田 1997: 360-362。

<sup>18</sup>西田 1997: 358-360。

一ノ卦ハ金ノ卦（ナリ）、身ノ大安、求財、賣買、皆成ル。行人來ル。  
疾病ハ快癒スル、出産ハ即チ恐怖アリ、訴訟ハ便ヲ得ル、結婚ハ大安  
ナリ。

こちらの文献では、「一ノ卦」から「十二卦」までが示されたあとに、もう一つ「十二満卦 □ハ壽ノ卦也」というのがついているとあり、合計 13 種類の卦辭が並んでいることがわかる。西田氏は「一から十二（と十二満）の数はどのようにして決めたのか、證據は全く残っていないが、たぶん一回の振りくじか骰子を使ったものと考え」ているようだが、これも銅錢 12 枚による占いの記述であろう。なお、上の二例では、裏の枚数が「満」によって表されているが、「満」の字で譯しているのは本来「塗る」を意味する文字であって、その發音 mafi（上 14）から「満」の字を当てたと説明されている。しかし、おそらくは「曼」の字の音寫であるとするほうがより相應しいだろう。また、各卦辭は銅錢の枚数につづいて「乾坤ノ卦」という上掲の漢語文書で見た（A）易による卦名、或いは「土木ノ卦」「木火ノ卦」「火水ノ卦」などの（C）五行による卦名が記されている。西夏本の「乾坤ノ卦」は、表 6 枚と表 12 枚の場合に 2 度登場するが、12 枚の場合は漢語本 S.813 でもやはり「否☷」（=乾坤）である<sup>19</sup>。したがって、これらの西夏本の祖本に漢語の銅錢占ト書があったことは十分に想像でき、漢語本にも最終卦辭として「無文十二曼」があった可能性が高い。

### 3. (C) 五行による卦名と判断

小断片である Dx.09941 + Dx.09981 を除いた 4 文書には「火木之卦」といった五行による卦名と卦辭の総合的吉凶にあたる「相生」等の判断が記されている。これについても先の（A）のように文書間で一致がみられるのかどうか、対照可能な箇所を抜き出してみる。

- 表 1 枚 水火之卦（S.813）水火相滅（S.1468）  
          水火相尅之卦（S.3724 + S.11415）
- 表 2 枚 □□之卦宜合相生（S.813） 火土之卦（S.3724 + S.11415）
- 表 3 枚 □水之卦宜合相生（S.813） 火木之卦相生（S.3724 + S.11415）
- 表 4 枚 □□□□□合相生（S.813） 金土之卦宜相生（S.3724 + S.11415）  
          土木之神合相生（S.5686）
- 表 6 枚 陰陽相割共相和合（S.813） 金□□相生吾和（S.1468）

<sup>19</sup>表 6 枚の場合は、漢語本では S.813、S.1468 ともに「乾艮」となっている。

以上のように、卦名の符合は表1枚の場合にのみ見られた。一方で、「相生」等の判断には概ねの一致がうかがえた。したがって、(A) 易による卦名と (B) 銅銭の枚数、(C) 五行による判断は固定的関係にあったが、判断の根拠に用いられる五行の組合せにはある程度の任意性が許容されていたとみなせる。

#### 4. (D) 項目別吉凶

占いをたてる項目には、身、學道、求所、行人、疾病、繫者、亡失、崇、訴訟、葬埋、口舌、逃亡者、禁者、田蠶、婚嫁、妊娠、宅舎など様々な内容がみられる。漢語銅銭占卜文書は一底本には基づかないと述べる黄氏に對して、王昌波氏は、宅舎、田蠶、妊娠、子孫、興生、口舌といった項目の有無などから、S.1468、S.5686、Dx.09941 + Dx.09981 が同系統に屬する文書であると論じた。残る2文書に對しては、優雅な文體を持つ S.813 を獨自發展した系統の文獻であると考え、漢語銅銭占卜文書が S.813、S.1468・S.5686・Dx.09941 + Dx.09981、S.3724 + S.11415 の3系統に分類できるとした。また、S.1468 では銅銭の表の枚数を「文」ではなく「仰」で記すこと、S.5686 と Dx.09941 + Dx.09981 では、「卜禁者無罪」「卜失物」「卜入舎」というように項目別吉凶が「卜」という見出しからはじまることなどから、S.1468 と他の2點を下位で分類している<sup>20</sup>。しかし、上でも見たように Dx.09941 + Dx.09981 には、S.813 と同じく六十四卦の卦名と圖象が配置されており、この點は王氏の分類では説明できない。寫本の系統を分類するには、對照可能な卦辭があまりにも少ないことが問題と言える。

#### 5. (E) 忌月

忌月は全ての文書に記されていたようであって、Dx.09941 + Dx.09981 にも缺損部付近にかろうじて「忌」の字が讀み取れる。さらに、S.1468、S.3724 + S.11415、S.5686 には忌月と合わせて忌日も記されている<sup>21</sup>。

---

<sup>20</sup>王 2013: 84-89。

<sup>21</sup>S.813 の表 11 枚の卦辭には、「忌子午人」という記述も見える。

- 表1枚 月忌三月九月 日忌戌亥丑未日 (S.1468)  
 月忌八月十一月 日忌子午 (S.3724 + S.11415)
- 表3枚 忌五月二月 忌午卯日 (S.3724 + S.11415)  
 忌二月四月 忌卯午日 (S.5686)
- 表4枚 忌四月十二月 忌巳丑日 (S.3724 + S.11415)  
 忌三月九月 忌丑巳日 (S.5686)
- 表5枚 月忌三月九月 (S.813)  
 月忌二月八月 日忌子丑午卯酉日 (S.1468)

このように、各文書の忌月・忌日を比較してみると、一致がみられるのは表3枚の場合の二月、卯午日、表4枚の丑巳日のみであった。したがって、これらの忌月・忌日に關しても文書ごとに任意性がみてとれると言える。ところで、怪奇の起こった日支によって「病患」「口舌」などの憂い事があることを示し、その厭勝法を明示する百恠圖などの占卜書に比して、銅錢占卜文書では忌月や忌日に行うべき厭勝の手段が説かれぬ。おそらく占いの目的や着眼點がそれらとは大きく異なるのであろう。特別な鎮祭や儀禮を必要としない占いである點は、簡便であったために當地で流行したとする黄氏の見解を支持すると言えるだろう<sup>22</sup>。

## 6. (F) 總合的吉凶・指示

S.813、S.3724 + S.11415、S.5686には、忌月・忌日のあとに「大吉利」(S.813)、「忌大賊 犯青龍土公 急解之吉」(S.3724 + S.11415)<sup>23</sup>や「不宜遠行 及死 問病 慎之大吉」(S.5686)<sup>24</sup>といった總合的吉凶や助言、指示の類いと思われる記述が見られる。ところで、これらが總合的吉凶であるならば、上述の(C)五行による判断と一致するはずである。實際にS.813で檢證してみると、「大吉」ないし「大吉利」と記されている卦は「相生」や「和合」と判断されていた<sup>25</sup>。

<sup>22</sup>黄 2001: 24-25。

<sup>23</sup>S.3724 + S.11415では「任身生男 宅舍大吉」というように、生まれてくる子の性別と宅舎に關する内容が忌月と總合的吉凶・指示の間に記されるが、これらは分類上は(D)項目別吉凶に含まれるべき内容であろう。

<sup>24</sup>釋文は王昌波 2013: 83に基づく。

<sup>25</sup>表12枚の場合には「陰陽相對」と記されるが、項目別吉凶にも吉兆が並んでいることから「相生」に類する判断であると考えられる。



## 7. 序文

冒頭でも述べた通り、S.813、S.1468、S.3724 + S.11415には序文が確認できる。釋文と内容については先行研究の各所で紹介されているのでここでは割愛するが、ここで着目したいのは、「昔周公輔成王 管蔡臣言 欲隱身□避 用錢十二文決吉凶」と、この占ト法が周公に由來すること述べる S.1468に對して、S.3724 + S.11415の序文は「李老君周易十二錢卜法一本 縵爲陰文爲陽 陰仰陽覆 老子易卜之法」として、創始者を老子に求めていることである。李老君の名をもつ占ト法であることから、王卡氏はこれを正統道藏には収録されない道鏡の占ト文獻であると紹介している。しかし、王昌波氏の言うように「周公」や「李老君」は実際には占ト法の創始者ではなく、その役割を假託されているにすぎないだろう<sup>26</sup>。その目的は占ト法の正當性や効果を高めることにありと考えられ、卦名に易の名稱が採用されていることも同じ理由によると考えられる。しかし、ここにはチベット語本との共通性が看取できるのである。

## 8. 小結

漢語銅錢占ト文書の構成を分析することによって、先行研究では詳細が明示されなかった以下の點について確認できた。

- ① (B) 銅錢の表裏の枚數と (A) 易による卦名、(C) 五行による判断は固定的關係にある（このとき、五行による卦名には任意性がみられる）
- ② 卦辭は表 1 枚から順に全てが裏の場合までが列記された
- ③ 占ト法が假託された「周公」や「老子」、卦名に採用された「易」の要素などは、占ト法とは關連せず、占いの正當性や効果を訴求する目的で挿入された要素である可能性が高い

最後に、これらの文書の書寫年代について考えてみたい。先行研究では、書體の特徴から S.813、S.3724 + S.11415、S.5686 は 10 世紀の作であると推測されている<sup>27</sup>。S.5686に限っては、冊子本形式であることから 9 世紀後半以降に屬すると想定される。一方、S.3724 + S.11415 は、無量壽宗要經の反古紙に書寫されている。ティツクデツェン治世下の敦煌では、漢語・チベット語の無量壽宗要經が

<sup>26</sup>王 2013: 80。王氏は、S.1468 と S.3724 + S.11415 において假託する對象が違ふのは、傳承の源流が異なるためであるとする。

<sup>27</sup>S.813 については Giles、S.3724 と S.5686 については鄭・陳によって 10 世紀または歸義軍期の書體であると指摘されている（Giles 1957: 224、鄭・陳 2014: 23-25）。

大量に書寫されたが、ツェンポの長壽祈念を目的とした寫經事業は彼の死によって終了し、經典は敦煌の寺院に保管された<sup>28</sup>。したがって、無量壽宗要經の復古紙に記された銅錢占卜書は、ティツクデツェンの死後、つまり841年以降に記された可能性が高い。残る2文書については、残念ながら書寫年代に関する言及がなされていないが、前後や背面に収録される文獻との関係から年代比定が進むことを期待したい。

## 二、チベット語文書の構成

チベット語銅錢占卜文書5點は、歸義軍期に作成された文書の特徴として挙げられるやや丸みを帯びた書體を持っている<sup>29</sup>。また、内容を相互に比較した結果、ITJ 741、P.t.1055 + ITJ 744、P.t.1056の3文書には綴り字の差異や記述の脱落・補填などの相違がみられるものの、内容には概ねの一致がみられた。したがって、これらは同一典籍に基づく文書であると考えられる<sup>30</sup>。數の上で優勢を占めるこれらを、本稿では假に流通本と呼ぶことにする。

### 1. 序文

唯一の完本であるITJ 742には卦辭以外に次のような序文と短い奥書が記されている。ITJ 1239の序文と合わせて提示する。

#### 【ITJ 742 序文】

かつて神變子（'phrul kyI bu）である孔子は知識と様々な智恵を集約し、打ち立てた。神變王（'phrul kyI rgyal po）<sup>31</sup>である李三郎（Li Bsam

<sup>28</sup>Iwao 2012。

<sup>29</sup>歸義軍期における古チベット語の書體的特徴については Takeuchi 2006: 39 を参照。

<sup>30</sup>P.t.1055 + ITJ 744、P.t.1056には14cm程度の細型の料紙が用いられているが、ITJ 741は26cm幅の料紙に書寫されている。一方で、ITJ 1239にも15cm幅の細型料紙が用いられていることを考えると、使用する料紙の幅は寫本の系統を反映しないと言える。

<sup>31</sup>スタン氏は、後代の文獻において唐の皇帝たちが *kong tse 'phrul rgyal* や *kong tse 'phrul chung* という通り名で呼ばれていることから、ITJ 742の序文に記された *kong tse 'phrul gyi bu* と *'phrul gyi rgyal po li bsam blang* がどちらも唐の皇帝を指すものであると述べた（Stein 1992: 11-12）。一方、林氏は、チベット語文獻中に現れる *Kong tse* が必ずしも孔子を指すとは限らないとしながらも、敦煌文獻にみえる *Kong tse* は孔子を意味すると述べる（Lin 2007）。

しかし、ITJ 1239の序文ではこの占卜法が周易の占いでであると述べられていることを勘案すれば、ここで占いの來歴が孔子に結びつけられることにも不思議はない。また、「馬上から」という表現が「孔子馬頭卜法」を示唆するものであるならば、*kong tse 'phrul gyi bu* と *'phrul gyi rgyal po li bsam blang* が共に唐の皇帝を指すというよりは、前者が孔子を後者が李三郎を指し、*'phrul gyi bu*、*'phrul gyi rgyal po* はいずれも孔子や李三郎を讃えた敬稱の類いであると考えられる。

blang) は馬上から<sup>32</sup> 廣い御心 (*thugs ring*) を持ってこの占いを確立した。この占いは、確固としていて迅速かつ的確である<sup>33</sup>。

【ITJ 742 奥書】

孔子が神通力によって (*'phrul gyis*) お作りになった銅錢十二枚の占いは以上<sup>34</sup>。

【ITJ 1239 序文】

周易 (*cu yag*) [の] 銅錢 (*dong tse*) [- - -] について占えば大變的確である。[- - -] 貴い [周] 易であります。吉凶と? [祓いの儀式?] について吉凶を求める。一度が凶で二度が吉 [ならば] ( / 一度が凶ならば二度は吉で)、何について占おうとも、銅錢 12 枚は *shlb shu* と *'gver tseng*<sup>35</sup> によって特別に調べるのである<sup>36</sup>。

ITJ 742 の序文では、占いの由來が孔子と李三郎、すなわち玄宗<sup>37</sup> に求められ、奥書でも再び孔子の作った占いであることを繰り返している。占いの創始者を孔子とするのは、おそらく漢語本の卦名でみたのと同じく銅錢占トを易と關連づけることで占いの由緒や効果を高めるためであろう。また、唐の皇帝に來歴が假託される由縁については、スタン氏が指摘するように皇帝のもつ「李」姓と、漢語本の一つのタイトルである「李老君」とが關連しているのかもしれない<sup>38</sup>。ITJ 1239 において占ト法が周易に由來するとされるのも、孔子に來源を求めるのと同じ理

<sup>32</sup>*chib gong nas* : 漢語占ト文書中には「孔子馬頭占法」という孔子が馬上から算木を投げて行ったとされる占ト法を記した文献がある (Or.8210/S.813, S.1339r, S.2578, S.9501v+9502, S.11419, S.13002v)。本文書にみえる「馬上から」という要素も、占いの來源が孔子であることを連想させるために挿入されたのかもしれない。孔子馬頭占ト法については、Kalinowski 1991: 140-141、黃 2001: 25-27、Kalinowski 2003: 347-351、余 2006: 261-265、鄭・陳 2014: 27-31 などを参照。

<sup>33</sup>*gnam dang po kong tshe 'phrul kyI bu // gtsug lag dang / gtsug lag mang po zhig mdor bstus ste / gtan la phab ba / 'phrul kyI rgyal po li bsam blang gIs chib gong nas thugs ring nas mo 'di gtan la phab pa lags so / mo 'di phugs brtan la 'phral rno /*

<sup>34</sup>*dkong tse 'phrul gyis mdzad pa'i dong tse bcu gnyis kyi mo // brdzogs so // ///*

<sup>35</sup>ITJ 1239 の表面には銅錢占トに關する 32 行の記述があり、背面にも 9 行の記述が認められるが、料紙の状態が悪いために内容を確定できる箇所が少ない。表面の 7 行目、13 行目、23 行目は朱書きされており、おそらく銅錢の枚数を記した箇所であることが實見調査によってわかった。序文にみられる *shlb shu* および *'gver tseng* は、他所にも散見され、おそらく漢語の音寫であろうと思われるが、今までのところ語彙を同定できていない。

<sup>36</sup>// *cu yag dong tse [+5] la 'debs na rab du rno 'o // [+1] 'I sgo don gdon [+5] yag rIn po che lags // bzang po bzang ngan dang // [cho] [ga] la mo bzang ngan 'tsal / lan cI g ngan na / lan gnyIs bzang [+1] gang la btab na / don tse [bcu?] gnyIs [shlb] [shu] dang / 'gver tseng gIs bye brag dbye'o //*

<sup>37</sup>Li Bsam blang は漢語の「李三郎」の音寫であり、唐蕃會盟碑の東面にも同じ名がみつかる。マクドナルド氏は、彼を唐の皇帝「玄宗」と比定し、Bsam blang が韻文の一節として年代記にも登場することも指摘している (Macdonald 1971: 283)。

<sup>38</sup>Stein 1992: 11-12。

由であろう。そうだとすれば、チベット語本の序文・奥書では、銅錢占卜が「易」や「李老君／老子」と関連づけられていることになり、漢語本の序文や卦名との間に共通性が認められる。さらに、ITJ 1239に「一度が凶で二度が吉ならば」とあることから、吉凶の確定のために投錢が三回行われていた可能性がみえる。漢語本 S.1468の序文にも「滿三擲」と三回の投錢を示唆する記述があることも大變興味深い。

## 2. 卦辭の構成

チベット語本の卦辭は表1枚から順に表12枚までが並び、最後にすべてが裏の場合が記されている。各卦辭の構成をITJ 742の表1枚の場合を例にみてみたい。

- |     |   |                  |
|-----|---|------------------|
| (a) | 銅錢の枚數                                   |                  |
|     | <i>dong tshe gI g gan na /</i>          | 銅錢1枚が表ならば        |
| (b) | 卦の名稱                                    |                  |
|     | <i>nyl ma khud par shar</i>             | 太陽が窪地に昇る卦であって    |
|     | <i>pa'I ngo ste /</i>                   |                  |
| (c) | 項目別吉凶                                   |                  |
|     | <i>khyIm phy a dang srId</i>            | 家運と繁榮運について占えば良い。 |
|     | <i>phyar btab na bzang /</i>            |                  |
|     | <i>bor rlag byung na rnyed /</i>        | 失せものは戻る。         |
|     | <i>nad pa la btab na sos /</i>          | 病について占えば治癒する。    |
|     | <i>'dron po la btab na nye</i>          | 待ち人（／旅人）について占えば  |
|     | <i>bar 'ong /</i>                       | 近く現れる。           |
| (d) | 総合的吉凶                                   |                  |
|     | <i>mo 'di ci la btab kyang rab bo /</i> | この卦は何について占っても大   |
|     |   | [吉]。             |

(a) 銅錢の枚數は、例のように表の枚數だけが記されるほか、「銅錢4枚が表で他が裏ならば *dong tse bzhl gan te gzhan bub na*」などと記される場合もある。また、ITJ 741 や P.t.1056 のように各卦辭の冒頭に表の枚數分の小圓が見出しとして描かれている場合もある<sup>39</sup>。

(b) 卦の名稱には、次に示すようにITJ 742 と流通本との間に相違がみられる。  
(d) の総合的吉凶と合わせて提示する。

<sup>39</sup>P.t.1055 + ITJ 744 では、縦に竝んだ2つの小圓が各卦辭の見出しとして描かれている。

	流通本	ITJ 742
表1枚	缺	太陽が窪地に昇る卦 (大 [吉])
表2枚	缺	人の卦 (大 [吉])
表3枚	缺	土と鐵の卦 (表記無し)
表4枚	水の卦 (大吉)	四天王八部衆の卦 (表記無し)
表5枚	金の卦 (大吉)	嘆きの卦 (凶)
表6枚	土の卦 (大吉)	水と金の卦 (大 [吉])
表7枚	離の卦 (大凶)	火と土の卦 (凶)
表8枚	土と水の卦 (平)	水と木が生まれる卦 (吉)
表9枚	孔子の卦 (大吉)	王の卦 (吉)
表10枚	火と土の卦 (平)	太陽と月が [晝夜の] 同時刻に昇る卦 (吉)
表11枚	<i>ki wang</i> の卦 (凶)	人の卦 (凶)
表12枚	太公の卦 (大吉)	千の太陽が一度に昇る卦 (吉)
表0枚	<i>srin zha mgo</i> の卦 (大吉)	太陽が沈む卦 (凶)

以上のように、流通本では五行や易に関する要素や孔子 (*kong tse*)、太公 (*the'u kong*) といった漢語を音寫した中國由來の名稱が多い。一方で、ITJ 742には來歴不明の名稱が多くみられ、流通本との間に一致する名稱が全く確認できない。したがって、チベット語文書中の銅錢の枚數と卦の名稱は文書ごとに恣意的であって固定的關係にないと言える。このとき、表0枚の場合を除けば、兩者の総合的吉凶には概ねの符合が看取できる<sup>40</sup>。つまり、漢語本とは異なり、チベット語本では (a) 銅錢の枚數と (d) 総合的吉凶のみが固定的關係にあると考えられる。

### 3. 小結

Nishida 2011でも述べたように、チベット語銅錢占卜書には漢語本を底本に作成されたことの證左とみなせる以下の3つの特徴がみられる。

第一には、漢語占卜書と共通する卦の名稱がみられる點が挙げられる。「土と水の卦 *sa dang chu'i ngo*」「金の卦 *gser gyi ngo*」「離の卦 *li'i ngo*」などは、漢語本と同じく五行の名稱や易の名稱を採用したものである。しかし、「水火之卦」「巽艮之卦」のように常に二要素から構成される漢語本とは異なり、チベット語本では

<sup>40</sup>流通本の表8枚と10枚の場合の「平」(*gzhi*)という吉凶判断は、「中」(*'bring*)と同程度であると考えられるが、「中」という吉凶判断を含まない文書では「吉」として捉えられるのかもしれない。

簡略化されている様子がうかがえる。また、「孔子の卦 *kong tse'i ngo*」「太公の卦 *the'u kong gi ngo*」などの卦名は、漢語銅錢占ト文書には見当たらないが、他の漢語占ト文書中には発見できる<sup>41</sup>。つまり、チベット語本の著者は銅錢占ト以外の漢語占トおよび占ト書にも通じた人物であった可能性が高い。

第二は、漢語からの借用語の存在である。借用語には「銅錢 *dong tse*」「孔子 *kong tse*」といった音寫による借用語だけでなく、「四天王八部衆 *gnam gru bzhi pa sde brgyad*」「不動 *gnam myi g.yo pa*」などの翻譯借用語の例もみつかると。チベット語の *gnam* は、通常「空」「天空」を指す語であるが、漢語の「天」が「空」以外に「神」も意味することから、ここでは、*gnam* によって後者の意味を表そうとしたと考えられる<sup>42</sup>。つまり、チベット語銅錢占ト書を作成した人物は、翻譯借用語を作り出せる程に兩言語に通じていた人物であったと考えられる。

第三には、占ト法が易や孔子といった中國の傳統に依據されている點が挙げられる。

では、チベット語本は漢語本からの翻譯あるいは翻案本と位置づけられるのであろうか。次章で検討してみたい。

### 三、漢語文書との比較からみたチベット語文書の成立背景

銅錢占トの占いがたてられる項目に関しては、漢語本とチベット語本の間には厳密な符合はみられない。たとえば、「學道」「崇」「田蠶」「葬埋」などはチベット語本にはみられず、「戰運 *dgra pya*」「惡鬼運 *gdon pya*」などは漢語本にはない。鬼神の名稱についてみれば、漢語本には「竈神」「青龍」「土公」、チベット語本には「ドン *gdon*」「ユルドン *yul gdon*」「デイモ *drI mo*」といった漢人社會、チベット人社會のそれぞれを反映する鬼神が登場する。つまり、占ト書の記述には各文化に根付いた占いの項目や鬼神が投影されており、チベット語本は漢語本の逐語的な翻譯ではないと言える。では、張氏らの指摘するように、チベット語銅錢占ト書は漢語本をチベットの風習に合わせて改編した翻案本であろうか<sup>43</sup>。

この点について考えるにあたり、銅錢占ト書の卦辭の構成や書式が骰子占ト書と近似していることを指摘したい。骰子占ト書は、チベット語占ト文書の中でも最多数を占め、敦煌のみならずマザルターグやトルファンからも出土している。お

<sup>41</sup>たとえば、「孔子の卦」「太公の卦」は周公ト法を記した文獻中に発見できる。周公ト法については、Kalinowski 1991: 139、黃 2001: 27-30、Kalinowski 2003: 338、余 2006: 265-267、鄭・陳 2014: 33などを参照。

<sup>42</sup>Nishida 2011: 324。

<sup>43</sup>張・陳 2010: 70-71。

そらく吐蕃期から歸義軍期にかけて最も流布していた占ト書であったと考えられる。以下に一例を提示する。

- (a) 骰子の目  
 @@@@ / @ / @@@@<sup>44</sup> 4 / 1 / 4
- (b) 韻文  
*kye byang rI nI phang pung na //* 和譯省略<sup>45</sup>  
*dngos gI nI phung rkorko //*  
*gser gI nI sbam dang mjal*  
*dga' yIs nI tvag kyIs blangs //*  
*snam phrag tu sur gis stsal //*
- (c) 項目別吉凶  
*mo 'dI nI khyIm phyA dang srog* この卦は、家運と命運について  
*phyA la btab na //* 占えば  
*nor ched po zhig rnyed pa 'dra* 大金を得るのと同じであるか  
*ba 'aM //*  
*grog ched po zhIg dang phrad par* 偉大な友人と出会うだろう。  
*'ong //*  
*de ma yIn na nye ba drung po zhig* そうでなければ正直な親族と出  
*dang phrad pa 'ong //* 会うだろう。  
*gsol shags zhig byas na gngang //* 願い事、辯明<sup>46</sup>をすれば叶う。  
*'dron po la btab na 'ong //* 待ち人（／旅人）について占え  
 ば現れる。  
*gnyen zhig byed na 'phrod //* 結婚をすれば適している。  
*tshong zhig byed na khe phyIn //* 商賣をすれば儲かる。
- (d) 総合的吉凶  
*mo 'dI cI la btab kyang bzang //*<sup>47</sup> この卦は何について占っても吉。

このように、骰子占ト卦辭と銅錢占ト卦辭には、占いをたてる項目や総合的吉凶、その定型表現に一致がみられる。上の例では韻文が記されている骰子占ト卦

<sup>44</sup> 骰子占いでは、1から4までの目を持つ棒状骰子ひとつを3回投賽して、得た目の組合せによって吉凶が判断される。各卦辭の冒頭には骰子の目を表す小圓が3つ一組で描かれている。おそらく骰子にも目の数を表す小圓が描かれていたのであろう。文書中では小圓は一重圓や二重圓で描かれているが、ここでは「@」で翻字する。

<sup>45</sup> 解讀が難解である上、銅錢占トの卦辭との比較には必要ではないので省略する。

<sup>46</sup> *shags zhig byas na : shags 'gyed pa* (藏漢大辭典 2832: 辯訴) として解釋した。

<sup>47</sup> ITJ 738.3 27-31 行目。

辭の (b) には、「ヤルモタン神が仰るには *lha dbyar mo thang gyi zhal nas*」というように神格名が挿入される場合や、説話や格言の類いが引用される場合もあるが<sup>48</sup>、これらはいずれも、卦辭の吉凶イメージを喚起させるという点で同等の役割を擔っていると考えられる。ITJ 742 の卦の名稱にみられる「太陽が窪地に昇る卦」や「嘆きの卦」などもまた吉凶をイメージさせるという要求に應える名稱であると言えるだろう。つまり、銅錢占ト卦辭と銅錢占ト卦辭には書式や内容、着想の点で近似性がみられる。おそらく銅錢占ト卦辭は骰子占トの卦辭の書式を下敷きに作成された可能性が高い。先にも述べたように、ITJ 741 と Pt.1056 では各卦辭の冒頭に銅錢の表の枚數を表す小圓が描かれているが、これも骰子占ト書の卦辭冒頭に描かれる骰子の目を表す小圓から着想を得たものかもしれない。

以上をまとめると、チベット語銅錢占ト文書は敦煌漢人文化に流通していた占ト法を、チベット語占ト書の書式や文脈に沿って記述したものであると考えられる。これが正しければ、漢語本に記されていた忌月・忌日がチベット語本では一貫して缺失していることも理解できる。しかし、占ト法の正當性や効果を高めるためには、各卦辭の名稱や占ト法の由來に五行や易、孔子などの漢語占ト書の要素が必要とされたのではないだろうか。

そして、これらのチベット語文書の著者は、漢語や漢語占ト書に精通した人物であると同時にチベット語やチベット語占ト書にも詳しい人物であった。書體的特徴から豫想される作成時期を勘案すれば、これらが歸義軍期の敦煌漢人社會で作成された占ト書であることは想像に難くない。漢語銅錢占ト文書の過半数が 10 世紀に作成されたという見解が正しければ、それらが流行していたのと同時代にチベット語本も作成されたことになる。10 世紀の河西地域において、チベット語は漢人、コータン人、ウイグル人の間の國際共通語としてのみならず、漢人同士の間でも使用されていたことが指摘されているが<sup>49</sup>、二言語で書かれた、しかし翻譯本ではない銅錢占ト文書の存在は、當時の敦煌漢人社會におけるチベット語使用の實體を物語るユニークな資料であると言えよう。

## 参考文献

### 【和文】

---

<sup>48</sup>西田 2008 参照。

<sup>49</sup>武内 2002。



- 武内紹人 2002 「歸義軍期から西夏時代のチベット語文書とチベット語使用」『東方學』第 104 輯: 106-124 (逆頁) .
- 西田愛 2008 「古チベット語サイコロ占い文書の研究」『日本西藏學會々報』第 54 號: 63-77.
- 西田龍雄 1997 『西夏王國の言語と文化』岩波書店.
- 山口瑞鳳 1985 「占い手引書」山口瑞鳳編『講座敦煌 6 敦煌胡語文獻』大東出版社: 533-540.
- 1987 『チベット上』東京大學出版社.

### 【中文】

- 陳踐 2007 「敦煌藏文 Ch. 9. II. 68 號“金錢神課判詞”解讀」『蘭州大學學報』第 3 期: 1-9.
- 郝春文・金滢坤 (主編) 2006 『敦煌社會歷史文獻釋錄 第一編 英藏敦煌社會歷史文獻釋錄 第四卷』社會科學文獻出版社.
- 郝春文・趙貞 (主編) 2010 『敦煌社會歷史文獻釋錄 第一編 英藏敦煌社會歷史文獻釋錄 第七卷』社會科學文獻出版社.
- 黃正建 2001 『敦煌占卜文書與唐五代占卜研究』學苑出版社.
- 王昌波 2013 『敦煌占卜文獻與社會生活』甘肅教育出版社.
- 王卡 2004 『敦煌道教文獻研究』中國社會科學出版社.
- 王堯・陳踐 1987 『吐蕃時期的占卜研究——敦煌藏文寫卷譯釋』香港中文大學出版社.
- 余欣 2006 『神道人心——唐宗之際敦煌民生宗教社會史研究』中華書局.
- 張福慧・陳于柱 2010 「敦煌古藏文、漢文本《十二錢卜法》比較研究」『天水師範學院學報』第 30 卷 第 3 期: 69-72.
- 張怡孫 (主編) 1985 『藏漢大辭典』民族出版社.
- 鄭炳林・陳于柱 2014 『敦煌占卜文獻彙錄』蘭州大學出版社.

### 【歐文】

- Giles, Lionel 1957 *Descriptive catalogue of the Chinese manuscripts from Tunhuang in the British Museum*, The Trustees of British Museum.
- Iwao, Kazushi 2012 “The purpose of Sūtra Copying in Dunhuang under the Tibetan Rule” In Popova, Irina nad Liu Yi (eds.) *Dunhuang Studies: Prospects and problems for the coming second century of research*, Russian Academy of Sciences, Institute of Oriental Manuscripts: 102-105.

- Kalinowski, Marc 1991 「敦煌數占小考」山田慶兒・田中淡編『中國古代科學史論』續編, 京都大學人文科學研究所: 131-156.
- Kalinowski, Marc ed. 2003 *Divination et société dans la Chine médiévale*, Bibliothèque Nationale de France.
- Lin, Shen-yu 2007 “The Tibetan Image of Confucius.” *Revue d’Etudes Tibétaines*, no. 12: 105-129.
- Macdonald, Ariane Spanien 1971 “Une lecture des Pelliot Tibétain 1286, 1287, 1038, 1047, et 1290.” In A. Macdonald (ed.), *Études Tibétaines dédiées à la mémoire de Marcelle Lalou*, Librairie d’Amérique et d’Orient, A. Maisonneuve: 190-391.
- Macdonald, Ariane Spanien and Y. Imaeda (eds.)1979 *Choix de documents tibétains conservés à la Bibliothèque nationale*, Tome 2.
- Nishida, Ai 2011 “An Old Tibetan divination with coins: IOL Tib J 742.” In Y. Imaeda, M. T. Kapstein and T. Takeuchi (eds.), *New Studies of the Old Tibetan Documents: Philology, History and Religion: Old Tibetan Documents Online Monograph Series*, vol.3, ILCAA: 315-327.
- De la Vallé Poussin, Louis 1962 *Catalogue of the Tibetan Manuscripts from Tun-Huang in the India Office Library*, Oxford University Press.
- Stein, Rolf Alfred 1992 “Tibetica antiqua VI. Maximes confucianistes dans deux manuscrits de Touen-houang.” *BEFEO*, LXXLX: 9-17.
- Takeuchi, Tshuguhito 2006 “Old Tibetan Buddhist Texts from the post-Tibetan Imperial Period (mid-9c. to late 10c.). In *Higashi Turkestan shutudo “Kokan monjyo” no sōgō tyōsa* 東トルキスタン出土「胡漢文書」の総合調査 (A report for Grant-in-Aid for Scientific Research (B), headed by Masaharu Arakawa, 2003-2005): 39-47.
- Thomas, Fredrick William 1957 *Ancient folk-literature form north-eastern Tibet*, Akademie-Verlag.

(作者は神戸外国語大學客員研究員)